

佯狂者アンドレイ伝（完結） 曆聖者伝 10月1日ポクロフについての講話

三 浦 清 美

The Life of Andrei-Salos – Translation and Commentary (The Latter Half)
A story and a preach of Pokrov from Great Calendar Hagiography (*Velikii Chet'i Minei*)

Kiyoharu MIURA

Abstract

In this bulletin the author provides his translation and commentary of the latter half of *The Life of Andrei Salos*. In addition, the translation and commentary of a hagiographic story and a preach of the Saint Andrei Salos posted the first of October of the calendrical hagiography “*Velikii Chet'ii Minei*” will be included. It is noted that the first half of *The Life of Andrei Salos* has been already been published in the previous volume of this bulletin.

Salos means a “holy fool” in Greek. Besides Andrei, Salos was known in Byzantium in the sixth century: Salos Simeon from Edessa, a city in upper Mesopotamia. Stimulated by the words of Paul (1 Corinthians 3: 18-19): “If any of you think you are wise by the standards of the age, you should become ‘fools’ so that you may become wise. For the wisdom of this world is foolishness in god’s sight.”, they went after Jesus Christ by pretending to be insane, looking foolish in the eyes of ordinary people, and suffering from their mocking. This tradition flowed into Russia and developed particularly in the rising Moscovian principedom.

Andrei Salos is supposed to have lived in Constantinople in the ninth century. His hagiography was written in Greek in the tenth century, perhaps in Constantinople, whereas its translation in medieval Russian was done from the eleventh century through the beginning of the twelfth century. Where the translation took place, however, is not clear.

His hagiography was already known in medieval Russia in 1164, when Andrei Bogolyubski, the prince of Vladimir, virtual ruler of Old Russia in those days, constructed the cathedral Pokrov-na-Nerli in memory of the victory against the Bolga Bulgars. In Russian *Pokrov* means the “guard” of the Mother of God from the threat of enemies. This episode taking place in Constantinople is mentioned in *The Life of Andrei Salos*. In the reign of Leo VI the Wise (886-912), Constantinople was believed to have been saved from the Arab siege because of the clothes of the Mother of God, which came down to the Church of Panagia Blachernae from Heaven during the battle.

本稿は、『中世ロシア文学図書館』シリーズの第20集として刊行されるものである。

承前 (*Waseda Rilas Journal No. 7*, pp.305-314)

彼の人生のはじまり

このときから、彼は自らの先人である、あの驚くべき佯狂者シメオン⁽¹⁾を手本として、何も食はずどこにも座りもせず、終日通りを走り回ったりふざけまわったりした。夜が来ると、彼は気の向くまま、眠らず、魂の

なかで祈りを捧げながら、町の通りをさ迷い歩き、夜じゅうずっと眠らず翌日の朝になって眠った。夜中に歩き回る気にならないときは、通りで犬が眠っている場所を探し、そこに行って犬を追い出して、その場所に御輿を据え、寝台に横たわるように横になったが、裸で無一文で貧しかった。菰も衣服も苦行衣もぼろ切れさえももたなかった。これらすべてのかわりに、まえにも述べたとおり、唯一ラシャ地をもち、それをまとって歩き回った。

朝起きると、彼は自分の心のなかでこう言った。「見よ。卑しむべき気違いのアンドレイよ。犬は、犬どもとともに、一晩中広々とした場所で眠りこけた。これからは働きに出かけよう。なぜなら、死が近づいているのだから。誰一人おまえを誑かさぬように。なぜなら、死のときに誰もおまえを助けてくれないだろうから。なぜなら、すべての人間はこの生から出ていくにおよんで、自分の労働の実りを受け取るのだから。不幸なる者よ、早く行こう。おまえはこの世で人々に嘲られるであろうが、天なる皇帝と神のもとでは賞賛と栄光に与かるだろう。

こう言うと、この聖なる人間は、偉大なる使徒パウロのように、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けるように懸命に力を尽くした。彼を見ると、人々は言った。「これこそ、新しい悪魔憑きだ。」ほかの人々は言った。「地は愚者がいなければ成り立って行かないのだ。」また、別の者たちは彼を突き飛ばし、首筋を殴りつけ、顔に唾を吐いた。

忍耐強くこれらすべてを耐え、腹を空かせ、渴きに苛まれ、寒さに死にそうになり、炎暑に焼かれ、これらの悪を忍び、彼はけっして打ち負かされなかった。彼は自分の心の密かな聖堂で祈りを捧げた。彼がそれを囁いたとしても、その祈りは遠くからは聞こえなかった。ぐつぐつ煮えたぎる鍋が沸騰しているときにもうもうと煙が立ち上るように、彼の口からは聖霊の湯気が立ち上った。それゆえに、彼を見た一握りの人々は、「この人のなかに住まう悪魔が、湯気を吐き出しているのだ」と言った。ほかの者たちは言った。「ちがう。悪霊がいることに憤怒した彼の心臓が、このように息を吐いているのだ。」しかし、実際はそうではなかった。神に気に入られた絶え間ない祈りが、おのが姿を明らかにしたのである。かつて無学な者たちが外国語で話すあらゆる人を酔っ払いだと思ったように、ここでもこの栄えある人のことをそう考えたのである。

娼婦たちについて

あるとき、彼が瘋癲の業をしながら、娼館のそばを通り過ぎた⁽²⁾。一人の娼婦がこの気違いを見ると、彼が纏っているぼろきれの端を引っ張って、彼を奥に引き入れようとした。真実にサタンを嘲笑するこの人は拒まず、彼女と一緒になかに入った。彼が娼館のなかに入ると、娼婦たちが彼の周りに集まってきた。そして、彼を慰みものにしてこう訊ねた。「あなたはどのようにしてこんな気持ちになったのかしら。」義人はただ嘲笑うだけで何も答えなかった。彼を小突き回しながら、彼らはアンドレイを汚らしい淫行に引き入れ、身体の秘密の場所を燃え上がらせようとした。ほかの者たちは接吻しながら純潔なる者を誘惑して恥辱に引き入れようとした。ほかの者たちは、「気違いさん、私たちと一緒に淫らなことを楽しみましょう。心の欲望をたっぷり味わうがいいわ。」

ところが、彼の身に驚くべき奇跡が起こった。彼はこれほどの誘惑に晒されながら、娼婦たちは、悪臭を放つこの不行跡へ彼を引きこむことができなかったのである。

娼婦たちは、自分たちの目論見をあきらめてこう言った。「この人は死人か、ものに感じるができない丸太か、動かない石なのよ。あれだけその気にさせようとしたけれど、何もできなかったわ。」

娼婦の一人がこう言った。「そんなおしゃべりをするなんて、おまえたちのバカさ加減には驚いてしまうわ。あの男は気違いで悪魔憑きのよ。お腹がすいていて、凍えていて、頭を枕につけるところもなし、そんなありさまでどうやってそんな気になるというの。そんな男、ほうっておきなさいよ。勝手に気違いじみたことをさせておけばいいのよ。」

(1) 6世紀末のエメスの佯狂者。この聖者の聖者伝から、『佯狂者アンドレイ伝』の作者はいくつかのモチーフを借用している。

(2) コンスタンティノープルでは、売春が広く行われ、街区ごとに娼館があった。

義人は、娼婦たちのまんなかに淫蕩の悪魔が立っているのを見た。その外貌はエチオピア人のようで、唇が厚く、頭には髪がないかわりに、馬糞と灰を混ぜ合わせたようなものが載っていた。その目はまるでキツネのようであり、古びたぼろきれがその肩を覆っていた。悪魔からは、不潔な悪臭が漂っており、そのきつい匂いに耐えることができず、至福の者は何度も唾を吐き、服で鼻をふさいだ。

義人が淫蕩への嫌悪に苛まれているのを見ると、悪魔は憤怒に駆られて叫んだ。いわく、「人間というのは、自らの心のなかで、甘い蜜を好むように俺にちやほやするものなのに、こいつはあちらこちらをほつつき歩きながら俺に罵言を吐き、俺を忌み嫌い、俺に唾をかけている。善のために瘋癲の業をしているというのは嘘だ。こんな風にして身体でする労働から逃げているのだ。」

至福なる者ははっきり自分の目でこの悪魔を見たが、娼婦たちは悪魔の声だけが聞こえ、その姿は見なかった。彼らのまんなかに座って、至福の人は悪臭を放つ醜い悪魔を嘲笑った。彼が笑っているのを見て、彼らは言った。「ごらん。あの男は、自分の悪魔と話して笑っているわ。」そのなかの一人が言った。「あの男、いい服着てるじゃない。あの服を剥ぎとって売ってしましましょうよ。私たちの今日の飲み物代くらいにはなるわよ。」彼らはすばやく立ち上がり、彼から衣服を剥ぎとり、裸にした。衣服を売って銀貨に替えて山分けした。彼ら全員に銅貨2枚分の取り分があった。

一番年かきの娼婦がほかの者たち全員に言った。「裸で放り出すのはいくらなんでもまずいのではないかしら。古い菰の一枚くらい着せてやったらどう？」彼らは菰をもって来ると、それをまんなかで二つに切って、衣服のかわりにアンドレイの首にかけ、彼を娼館から追い出した。

アンドレイは外に出ると、瘋癲の業をしながら、走りはじめた。アンドレイを見た者は、アンドレイを嘲笑ってこう言った。「気違いさんよ、よい馬衣がおまえの口バのうえに懸っておるぞ。」彼は答えた。「ほんとにおまえは瘋癲じゃなあ。私はよい着物を着ておるぞ。なぜなら、私の主人が私をパトリキオス⁽³⁾にしてくださったからな。」

キリストを愛するある者たちが、彼が乞うたのではないにもかかわらず、彼に銅貨をあたえた。なぜなら、キリストが彼のことを気遣ったからである。いくらその人々が彼にあたえようと、彼は受け取った。一日に20枚の銅貨になることもあったし、30枚の銅貨になることもあったし、それ以上もらうこともあった。彼は乞食たちが集まる人目につかない場所を探し出し、手に銅貨をもってその場所に行った。乞食たちが彼の目論見を見抜かぬように、彼は気違いのふりをしてそこに腰を下ろし、銅貨を弄びはじめた。乞食の誰かが彼から銅貨を取りあげようとしたとき、彼はその乞食に平手打ちを食らわせた。これを見て残りの乞食たちが棍棒をもって彼に立ち向かってきて、仲間の復讐をしようとした。これを逃亡のよい機会として、彼は銅貨を投げつけ、乞食たちのもとから逃げ去った。乞食たちは彼の銅貨をまんまとせしめることができたのである。

金持ちの死者の幻視

あるとき、アンドレイが自分の魂の仕事をしながらか歩いていて、彼は遠くに、死者が運ばれてくるのを見た。それはたいへん有名な、金持ちの人間だった。

たくさんの人々が柩のあとを歩いていた。たくさんろうそくと香炉を持って歌う、人々の大きな声が聞こえていた。呻きとどろくような泣き声が近親者から起こった。

故人に起こったことを見つ、聖者は立ち止まり、長いあいだ我を忘れていた。そして、見た。ろうそくのまえにたくさんエチオピア人の悪魔が歩き、歌い手の声をかき消しながら、「とんだ災難だった、とんだ災難だった」と叫んでいた。彼らが香炉を振ったところは、糞の匂いがした。彼らは袋のようなものをもち、灰と燃えかすを交互にまき散らしていた。これらたくさんのは踊り歩きながら、恥を知らぬ売春婦のようにふてぶてしく笑い、犬のように吼え、豚のように金切り声をあげていた。この連中にとっては、死者は陽気な騒ぎと喜びの口実だった。彼らのある者たちは、遺骸を載せた寝台のそばを歩き、死人の顔に汚穢と糞をふりかけ、別の者たちは宙を舞いながら寝台のそばを飛んでいた。

(3) ビザンツ帝国の高官の爵位。

その寝台と罪深いその遺骸からは猛烈な悪臭がたちのぼった。それは便所の肥取りをするとき、あたりにどろどろの糞尿をこぼしてしまったり、悪臭のする汚穢をぶちまけてしまったときに、そうであるような匂いだった。別の者たちは故人の顔にアザラシを載せたり、アザラシの脂やそのほかの悪臭のするものを振りかけたりした。また、別の者たちは柩の後ろをついて行って踊ったり、手を打ったり、脅かすように足を踏み鳴らしたり、笑ったり、埋葬の歌を歌う人のうえからからかっていたが、その姿は目には見えなかった。彼らはこう宣告していた。「神よ、おまえたちの誰一人として光を見ることはできないのだ。哀れなキリスト教徒たちよ、『聖なる者たちとともにかの者の魂に安らぎを』を歌っているのは、犬に向ってなのだ。おまえたちは、あらゆる悪をした者を神の僕などと呼んでいる。」

すると、聖者には恐ろしい光景が見えた。彼は視線をやると、このような光景が見えた。不浄なる悪霊の王が、見る者たちを恐怖で震えあがらせる、燃えるような眼差しで、炎と硫黄と樹脂を手にもち、かの不幸な者の遺骸に辱めをあたえ、炎で燃やしてしまうように、かの者の柩に近づいていったのだ。それは埋葬のあとに起こった。

故人を運んだ葬列が通りすぎたとき、アンドレイが目をやると、美しい若者がそのあとを歩き、悲しみに打ちひしがれて泣いていた。その若者は号泣しながら、聖なる者のまえを通り過ぎていった。

この若者はほんとうに故人の親類の者で、そのゆえにこのように泣いているのだと考えると、主との密かな約束を忘れたごとくに、アンドレイは手を差しのぼし、泣いている若者に触れ、このように言った。「天と地の神に誓ってお伺いしますが、あなたが泣いている原因は何なのですか。どうしてあなたはそんなに涙を流しているのですか。死者を偲んでそんなに泣いている人を、私はいまだかつて見たことがないのです。どうか私に教えてください。あなたはどのようにしてそんなふうになさっているのですか。」

天使は彼に言った。「私が泣いているのは、いま葬ろうとしているのをそなたが見ているその人を、悪魔が奪い去ってしまったからです。それが、私が泣き悲しむ原因です。この人を失ってしまったがゆえに、私は泣いているのです。」

聖なる者は彼に言った。「わが愛しい友人よ、どうか教えてください。なぜならば、私はあなたが誰だか、わかってしまったからです。この人の罪はどういうものだったのですか。」

天使は彼に答えた。「アンドレイよ、そなたは神に選ばれし者であり、このことを知るのを許されているのですから、よく耳を傾け、知るがよい。そなたの素晴らしい魂は清らかで輝いています。それはあたかも純金を見るごとくです。それゆえに、私は自分の悲しみが少しばかり慰められました。この者は皇帝のお側に仕えた高官で、生きていたあいだは罪深く、邪悪な人間でした。あらゆる点で淫蕩で、姦通を好み、少年と交わり、狡猾で、無慈悲で、高慢で、傲岸で、金銭を好み、嘘つきで、人間を憎み、執念深く、賄賂好きで、誓いを常習的に破り、貧しい僕たちを、飢えや打擲や衣服を満足にあたえぬことで殺しました。彼らを、服も靴もなしで、冬の寒空に放りだしました。多くの者を棍棒で打ち据えて馬屋に放りだしました。彼は卑しむべき、神をも恐れぬ、少年や去勢者への欲望に焼かれ、このいやらしい唾棄すべき罪のゆえに3百人にも及ぶ人間を汚しました。ところが、主においての友人よ、この男に刈り入れの時が来たのです。死の時が来ても、口にはできない多くの罪にはまり込んだこの男は、悔い改めませんでした。そなた自身が見たとおり、彼の汚らしい遺骸は、これほどの侮辱とともに墓地へと運ばれていくのです。このゆえに、おお聖なる魂よ、私は深く嘆き、大いなる悲しみのなかで泣いていたのです。なぜなら、私の愛しい者よ、私は悪魔たちの物笑いの種となり、猛烈な悪臭の溜まり場となってしまったのです。」

天使の話

神の天使がこう話し終わると、聖者は天使に言った。「友よ、私はあなたにお願いします。どうぞ安心なさってください。この男は、けがらわしい最期にふさわしい者だったのです。この男は悪をおこなうのに一生懸命精を出し、いまは悪で腹いっぱいになったのです。炎に等しい者よ、喜びに溢れる者よ、主、全能のサヴァオフの名において、いまから永遠にそなたは善なるものなかにあるでしょう。」

こうした言葉のあと、天使は飛び去り見えなくなった。聖なる者が天使と話していた通りを行きかう者たち

は、彼がたった一人で立ち話をしているのを見た。というのは、その者たちはそれにふさわしくなかったので、天使の姿が見えなかったからである。彼らはたがいにこう言い交わした。「あの気違いを見ろよ。脈絡のないことを壁と話して、またとち狂ったことをやってるぜ。」そして、彼を突き飛ばして追い払ってこう言った。「おい、気違い、悪魔憑き、おまえは何を思いついたのだ。壁とお話しているんだからな。」

聖者は彼らが話し合っていることを耳にすると、微笑んで何も言わなかった。彼らの無知を笑いながら、彼らからはなれ、人目のつかぬ場所に行き、沈黙の業に入った。

死者のための聖者の祈り

墓地に運ばれた不幸な者を思い出して、聖者はひどく泣きはじめた。結果、彼は疲れきり、長いあいだ泣いていたためにその目は膨れ上がってしまった。涙に暮れながら、彼は主にたいする祈りを口にした。「人知のおよばぬ、目に見えぬ、恐ろしい父なる神、造物主にして主、終わりなき世々の創造者、あらゆる賢さと知識の源なる者よ。理解におよばぬ生誕、聖なる誉れのすばらしさ、父とそなたに熱愛される全能なる聖霊に似て、父と聖霊と同じように崇敬される、大いなる知恵から根源的に生まれ、つねにそなたを生んだ者の胸にやすらい、そなたが人間になったことにより、分かちがたい三位一体の一つとなった者よ。あなたにお願い申し上げます。この不幸な者を樹脂と硫黄の責め苦からお救いください。自分の聖なる五臓が、あなたの取るに足りない僕の祈りに向うようにしてください。汚されたその魂には救済はないのです。なぜなら、死がこの者にとってすべてを閉ざしてしまうでしょうから。あなたに願ひ奉りお祈り申し上げます。彼の身体がそのような恥辱を免れますように。深きに住まうあの呪われた蛇が獲物を喜びつくし、魂と肉体とを一呑みしてあなたのお名前を辱めませんように。」

聖者は祈っていると、まぶしい明かりが彼をつつんだ。聖者は恐怖に打たれ、自分がこの不幸な者の柩に近づくのを見た。すると、どうだろう、主の天使が手に炎の杖をもち、そこにいた悪霊どもを追い散らしながら、すばやい稲妻のように降りてきた。悪霊たちは消え去り、樹脂と硫黄で遺骸を燃やし、辱めるのをやめた。聖者はこれを見ると、彼の願いをかなえてくださった神に感謝をささげた。

墓を暴く盗賊について

何日かのちに、ある貴顕の娘が死んだ。自らの人生を純潔に過ごした、男を知らぬ娘であった。死の床で父に遺言を残し、町の郊外にある彼らの領地にある、葡萄園のなかの教会に葬るように頼んだ。その時が来ると、遺骸を、彼女が父親に頼んだその場所に運んだ。

そのとき、死者の墓を暴き、遺骸から剥ぎとることを生業とする、一人の盗賊がいた。この男は通りに立って、この娘がどこに運ばれ、葬られるのかを見ていた。盗賊は娘がどこに葬られたのかを見届けると、例のことをしようと考えた。ちょうどそのとき、主のために自分の生業をおこなう聖者がそのそばを通り過ぎた。心の両目で事を見通して、この狡猾な男の邪悪な企みを魂で理解した。聖者は男に、この企みをやめさせようとした。なぜなら、それがどのような業罰を招くかを知っていたからである。聖者は気迫のこもった目で盗賊の顔を見ると、憤りに満たされた様子でこう言った。「柩に横たわる者の、衣服を掠め取る者を裁く、聖霊はこう言われる。『おまえはもはや太陽を見ないであろう。おまえはもはや昼を見ないであろう。おまえはもはや人間の顔を見ないであろう。なぜなら、おまえの家の門は閉ざされ、金輪際開くことはないから。昼は輝きを失い、永遠に輝くことはないであろう』と。」

盗賊はこれを聞いたが、聖者が何を言っているかわからず、誰のことをも気かけずに立ち去った。聖者はそれを見てこう言った。「行くがよい。行くがよい。愚かな者よ、盗むがよい。イエスに誓って言うが、もしもおまえがそうしたら、おまえは太陽を見ることができなくなる。」盗賊は、アンドレイが自分に言ったことをすっかり理解し、義人と呼んで聖者を誉めはじめた。「そのとおりだ。不幸な悪魔憑きめ。おまえは悪魔の唆しに乗って、誰もが知るはずのないこと、秘められたことをしゃべっている。だがな、俺はおまえの言葉が実現するかどうかを見極めるために、あの場所に出かけるのさ。」聖者は瘋癲の業をしながら通り過ぎていった。

夜が来ると、この愚かな男は時を測って墓に近づき、石をどけて墓のなかに入った。手始めに帷子と上っ張

りをはぎとった。帷子も上っ張りも美しく、高価なものであった。これを盗んで、立ち去ろうとした。

しかし、人間を憎む悪魔は、シャツをはぎとり、遺骸を裸にするように唆し、この男はそのとおりにした。盗賊がシャツをとると、神のご意志によって、というのもそれが真に驚くべき話だからであるが、死んだ少女が右手をもちあげ、盗賊の頬を打った。するとたちまち、彼の両目は見えなくなった。盗賊は恐怖のあまり震えだした。恐怖のあまり、盗賊の顎と歯はガタガタ鳴り、膝はがくがく震えた。

死んだ乙女は自らの口を開き、このように答えた。「おまえは神もその天使も恐れなかったのだから、呪われ不幸になるがよい。おまえは人間なのだから、女性の裸の身体を見ることに恥じらいを感じてもよいはずだ。おまえは、はじめに剥ぎとったものだけで、満足すればよかったのだ。私の不幸な体に、シャツだけは残しておくべきだった。だが、おまえは私にたいして無慈悲で残酷にふるまい、再臨のときにおよんで、すべての聖なる乙女たちのまえで、私を笑いものにしようとした。私は、おまえが金輪際盗みをする気にならぬよう懲らしめてやろう。おまえはキリストが生きてる神であること、裁きがあること、報いがあること、死後に命があること、主を愛する者に喜びがあることを知るがよい。」

乙女はこれを言い終わると、立ち上がってシャツを取りあげ、それに袖を通し、帷子と上っ張りを身にまとうと、ふたたび横になり、「主よ、私の望みはあなたのみにあります」と言って、平穏な眠りについた。

この不幸な男はようやくのことで葡萄園の壁にたどり着き、そのまま外に出た。その近くに道があり、手で壁から壁を探りながら、城門までたどり着いた。盲になった原因は何か、何が起こったのかと訊ねる人々にたいて、彼ははじめ違うこと、ほんとうではないことを話していた。だが、そのあとで一段落すると、ある友人に本当のことを話した。そのときから、この男は施し物を求め、養ってもらうようになった。

ときどき、座って声を限りに叫びながら、こう罵った。「飽くことのない喉よ、おまえなど呪われてしまえ。おまえと私の腹のおかげで、私は盲になったのだから。」また、こうも言っていた。「貪り食らうだけで働かない者は、盗みをおこない、その報いとして罰を受ける。」

聖者のことを思い出しながら、自分の身に起こるはずだと、聖者が彼に予言したことが、すべて実現したことに彼は驚いた。多くの者たちはこの奇跡のことを伝え聞いて、悪魔の所業から遠ざかり、習慣も行いも善良になった。

聖者が嫌った貴頭について

この聖者がときに競馬場でいつものように瘋癲の業をおこない、めちゃめちゃなことをしていたとき、彼を見た人々が、ある者たちは心を痛め、ある者たちは嫌悪を感じながら、邪悪な悪魔に憑りつかれていると彼を呪っていたところに、ある貴頭が通りかかり、アンドレイを見るや、嫌悪のあまりアンドレイに唾を吐きかけた。

キリストのお気に入りの方は、長いあいだじっと彼を見て、彼の生活を見抜いてこう言った。「狡猾なる放蕩者よ、教会を侮蔑する者よ。真夜中に起き、教会の朝禱に向うようなふりをして、この不信心者め、サタンのもとに朝禱に行くというのは、おまえのことか。だが、すでにおまえにその報いが下るであろう。すべてを見そなわす恐ろしい目から隠れることを期待しておまえがした行いによって、おまえは報いを受けるであろう。

これを聞くと、この貴頭はこれ以上自分が辱められることがないように、馬に鞭を当ててその場を去った。なぜなら、この貴頭はコンスタンティノープル海軍の司令官代理だったからである。

何日かあとにこの男は悪い病にかかり、少しずつ痩せて行った。教会から教会へと、医者から医者へと、この男は運ばれていったが、軽快することはなかった。この不幸な男はほどなく、永遠の苦患に向けて旅立った。ある夜、聖者はこの貴頭の屋敷で、炎の姿をした主の天使が西から飛び来るのを見た。炎の天使は恐ろしい眼差しで睨み、手に大きな炎の杖をもっていた。彼はこの不幸な者の屋敷のなかに入り、脅しながら、怒り狂いながら、彼の家を根こそぎ打ち倒そうとした。炎の天使が病人のもとに行くと、天から次のようなことを言う声のとどろきわたった。「この冒涇者、ソドムの住人、放蕩者、不信心者を打て。打ちながら、この男に教諭すがよい。『男と淫蕩を楽しまたいか。他人の妻とふしだらなことをしたいか。悪魔のもとへ、朝禱を捧げに行きたいか』と。」

天使は彼を打ちすえ、教えを垂れはじめた。天使の声と打つ音は聞こえたが、打つ者は見えなかった。苦患

にさいなまれたこの不幸な男は、否応なく、恥も外聞もはばからず懇願しはじめた。「もうこれ以上、淫蕩な行いはいたしません。私を憐れんでください。」このように三日三晩苦しみ、「もうこれ以上、淫蕩な行いはいたしません」と繰り返し言って、息絶えた。友人たちよ、私はこのことを聖なるアンドレイから聞き、私たちの魂のため、その教訓のために、この世で生きながら自らを清浄に保つべくこれを書き留めたのである。

私は聖者に訊ねた。「どうして、また、どのようにしてこの者は罪を犯したのですか。」

私に答えて聖者は言った。「この男には、二人の去勢した男たちがいて、彼らとともにこの男は淫行をしたのである。彼らはこの男に昼飯を買い、町を歩いてこの男のために、あるときは処女を、あるときは有夫の婦人を、あるときは売春婦を探してきた。彼のすべての悲惨は、彼ら二人に由来する。彼は鶏が鳴くまえに、彼らのもとに出かけたのだ。彼の妻は何度も、こんな時間にどこに行くのかと尋ねたが、彼はそのたびに教会に行くのだと答えた。こう言って立ち去ると、彼はまず悪魔の所業をおこない、そのあと汚れにまみれて悪臭を放ちながら教会に入った。多くの者たちが朝早く彼が起きるのを見て、この人は聖なる人間であると言った。だが、この男は密かなる悪魔であった。このようにふるまうことで、この男は神に背いた。彼は罪人であったことに飽き足らず、自分が聖なる者であるという評判をもでっちあげたのだ。」

ヴラケルネの聖なる神の御母の幻視について

ヴラケルネ⁽⁴⁾にある聖なる教会で徹夜禱がおこなわれていたとき、聖なるアンドレイがそこに行き、いつものとおりの振る舞いをしていた。エピファニオスが従僕を連れてその場にいた。夜半まで立つ者たちもいたし、明け方まで立ちとおす者たちもいた。夜の4の刻⁽⁵⁾になったとき、聖なるアンドレイはありありと、非常に背の高い聖なる神の御母が、恐ろしい僕たちを従えて、皇帝の門に入ってくるのを見た。僕たちのなかには、敬虔なる洗礼者⁽⁶⁾と雷の息子⁽⁷⁾がいて、両側から神の御母を支えた。白い服をまとった、ほかの聖者たちがまえを歩くとすれば、祈禱歌を歌う者たちが神の御母のあとにつづいた。神の御母が升壇に近づいたとき、聖者はエピファニオスに近づいて言った。「おまえは全世界のご主人さま、天の女帝が見えるか。」エピファニオスは言った。「わが師父よ、見えます。」彼らが見ているまえで、神の御母は跪き、神のような自らの御顔を涙で濡らしながら長いあいだ祈りはじめた。祈りおえると至聖所に来て、そこに立つ人々のために祈りを捧げた。

祈りおえると、神の御母はその聖なる頭と肩を覆っていた、稲妻のように輝くマフォリオンを取り去り、自らの聖なる腕に取ると（それは恐ろしくかつ巨大であったからだが）、そこに立っていたすべての人々のうえに広げた。二人の聖なる者たちは、マフォリオンが長いあいだ人々のうえに広げられ、エレクトルム⁽⁸⁾のように神の栄光を発しているのを見た。聖なる神の御母がそこにいるあいだ、二人にはそのヴェールが見えていたが、神の御母が遠ざかると、見えなくなった。というのは、神の御母がヴェールをもって行ってしまったからである。だが、そこにいた者たちには恩寵が残された⁽⁹⁾。

出典：Житъе Андрея Юродивого (Подготовка текста, перевод и комментарии А.М. Молдована) // Библиотека литературы Древней Руси. Т. 2. С. 330-359, 541-544.

(4) コンスタンティノーブル西北の街区の名前であるが、ここではレオ1世（在位 457-474）の治世の後半に建立された聖遺物教会を指すと考えられる。この教会に若い二人のパトリキオス、ガルバとカンディドがカペルナウムから持ちかえった神の御母のマフォリオン（肩や頭を覆うヴェール）が保存されていた。

(5) 夜が12等分されていたと考えるならば、「4の刻」は晩の10時から11時に相当する。

(6) 洗礼者ヨハネのこと。

(7) 『黙示録』の作者である神学者ヨハネを指す。

(8) 琥珀、または、80%の金と20%の銀の合金を指す。

(9) ギリシア語のテキストでは、物語の結末部分がつづくが、その部分は中世ロシア語テキストには存在しない。それは以下のとおりである。「エピファニオスはこれらすべてのことを神孕める師父（すなわち、アンドレイ）の取りなしによって見たのである。なぜなら、アンドレイはエピファニオスとかなんかに心がつながったので、アンドレイはエピファニオスに自分の見たことをすべて伝えた。エピファニオスはアンドレイにとって仲立ちの役割をした。アンドレイは彼を心のなかで寄り添わせることによって、エピファニオスを大いなる誉れに与からせたのである。」

神の御母の庇護に寄せる物語と講話

〈翻訳 1〉

10月1日

この日、私たちは聖なる神の御母の庇護（ポクロフ）をお祝いする。聖なるアンドレイとエピファーニイの幻視について。二人が空中に聖なる神の御母を見たこと。

敬虔なる聖アンドレイと聖エピファーニイの幻視こそ、恐ろしく驚くべきものではありません。この二人は空中に、ヴラケルネの聖なる教会に、天使たちと、洗礼者ヨハネと、神学者ヨハネと、そのほかの多くの聖人たちを引き連れてお越しになった、聖なる神の御母を見たのです。あの二人は、人々が教会に押し寄せ、涙に暮れながらその息子に、完全な平和のために祈っているのを見ていました。アンドレイはエピファーニイに言いました。「平和のために祈る者たちの、天の女帝にして女主人である方が見えるか。」エピファーニイは言いました。「父よ、見えます。」神の御母は、エレクトルムよりも眩しく輝く聖なるマフォリオンに覆われて、教会にいらっしやいました。

私がこの話を聞いたとき、私は考えました。「この恐ろしい慈愛あふれる幻視、なによりもまして、私たちの希望であり、私たちの庇護でもあるこの幻視が、祝日なしに済まされていいものであろうか。」女主人さま、私は、自らの息子におっしゃった、そなたの慈愛あふれるお言葉に望みをかけるのでございます。そなたは祈ってこう言われました。「天の皇帝よ、私の名が覚えられるあらゆる場所でそなたを讃え、そなたの御名を呼ばうすべての人間を受け容れたまえ。この場所を聖なるものとし、私の名によってそなたを讃える者を、彼らのあらゆる祈りと応答を受け入れながら、栄えある者となしたまえ。」この御言葉に望みをかけながら、私はそなたの聖なる庇護の日が祝日とならぬままで済まされぬように、発願するのです。まったく福なる方よ、もしもそなたが、そなたの庇護の敬虔なる祝日をお飾りになりたいとお思いになるなら、限りなき慈悲深き方よ、そなたを讃える者が、大なるそなたの名前の祝日が輝きわたるのを見て歓喜にむせぶように、その祝日を飾られるがよいでしょう。かの地で教会にいた人々を慈悲深く覆われたように、罪深きそなたの僕である我らをそなたの両の翼の庇護で守りたまえ、我らに悪しきたくらみと企てを抱く者たちを斥けたまえ、そなたの息子の慈愛を以って、畏れと信仰をもって我らのすばやい助け手であり庇護者であるそなたのもとに駆けつけ、そなたに望みをかける我らを、この世でも来世でも救いたまえ。

聖なる使徒アナニヤ⁽¹⁰⁾の記念する10月1日は、父と子と聖霊の誉れのために、かくのごとき祝日として祝うことが定められたのです。

〈翻訳 2〉

至聖なる女主人なる我らが神の御母、永遠の処女マリアの、霊験あらたかなる庇護への賞賛の辞。謙遜なる修道司祭、パホーミイの作品。

人間は、賞賛をもって聖なる祝日を、聖人たちの祝日を祝うことを習わしとしてきた以上、すべての祝日のなかで最も聖なる、敬虔なる祝日である、いと清らかなる女主人、我らが神の御母、永遠の処女マリアの祝日⁽¹¹⁾は、さらにいっそうの愛をもって崇敬され、神の御母は、聖人のなかでもっとも高き者として、天の皇帝にしてご主人さまをお生みになった、天の女帝にして女主人として、最高の賞賛が捧げられなくてはならない。しかしながら、私たちがいと清き神の御母の誕生の、敬虔なる祝日を祝うようになってから、僅かな時間しか経っていない。その誕生によって、原初の母⁽¹²⁾の呪いは消滅し、アダム⁽¹³⁾は永遠の枷から解放され、神は私た

(10) 70人使徒の一人。キリスト教の残忍な迫害者であったサウル（のちのパウロ）のことを幻視で見たアナニヤは、ダマスカスで、主の光の眩しきで視力を失ったサウルを探し出し、その視力を回復させる。視力を取り戻したサウルはキリスト教に改宗する。アナニヤは「律法にしたがって生活をする信仰深い人で、そこに住んでいるすべてのユダヤ人のなかで評判の良い人」だった（『使徒言行録』22章12節）。

(11) 正教会の12大祭の一つで、9月8日に祝われる。

ちと和解したのだった。なぜなら、ヤコブの階段⁽¹⁴⁾がそのとき堅固に据えつけられ、それを伝って神が人々のところに降りることを欲することができ、人々が天にいたる道を創ったのだ。そのとき、預言者たちは、自らの預言が成就したことを喜んだ⁽¹⁵⁾。そのとき、ダビデは曾孫⁽¹⁶⁾が生まれたのを見て、豎琴を爪弾き、息を詰まらせて言った。「娘よ、聞くがよい。見るがよい。そなたの耳を傾けるがよい。」⁽¹⁷⁾そのとき、預言者たちだけではなく、天上と地上の被造物がともに祝った。いまや、永遠に敬虔なる新しき、女主人にして神の御母の庇護の祝日がある、と。すべての人々が確信をもって知ったのだから。神の御母は、私たちとともに平安のうちにいたとき、自らの創造主である息子に、請願をもって慈悲深く臨まれたこと、そればかりではなく、その栄えある逝去ののちますます、地上の者たちから天上の者たちへ、祈りや慈悲の心を顕され、自らの共苦を示され、私たちが訪ねることをやめないことを。

どこから、どのような原因で教父たちが、この敬虔なる庇護の祝日を祝うことを、コンスタンティノーブルにおいて決定したのかを知ることは、真実に素晴らしいことである。数々の救済の業がなされたコンスタンティノーブルでは、しかしながら、あの預言者の頃のように、真実が枯渇し、罪が増し加わった。ダビデは、イスラエルで真実が蹂躪されているのを見て、祈ってこう言った。「主よ、私をお救いください。というのは、義人がいなくなったからです。人間の息子たちのなかに真実な者はいません。」なぜなら、真実が無法を打ち負かすとき、我々は神の慈悲を引き寄せ、罪あるときは、神の不興を呼び招く。私たちがすでに言ったように、コンスタンティノーブルでは、神の不興を呼び起こすような、何らかの無法が起こった。しかし、神の御母は自らの助けなしにおくことはせず、つねに祈っており、人間のことで請願することをやめることはない。このようにして、人々が佯狂者であると思っていた驚嘆のアンドレイは、知恵において自らを雄弁家だと思いこんでいた多くの者たちを、理性において凌駕していたのだった。彼は表面的な知恵は求めず、何よりも高きを望み、それに向かって精進し、佯狂の業のしたに自らの偉大な生を、まるで粘土の器のなかに黄金を隠すように隠し、このゆえに名声を求めなかった。この誉れのゆえに、天使たちにも罪ある人々にも現前する、かの地の恥辱を避けるため、人々の辱めを恥とも思わなかった。この至福のアンドレイとその弟子のエピファーニイに、神々しい奇跡のようないと清き方の幻視が、夢のなかでも想像のなかでもなく、現実にもまざまざと現れたのである。このことをこれから語ることにしよう。

いま私たちが語っている至福のアンドレイが、その弟子のエピファーニイとともに、ヴラケルネいう名前の、女主人にして神の御母の神々しく偉大なる教会にやってくると、栄えある幻視を見た。教会の空中にキリスト教徒の守り手が、天使階層の多くの戦士たちと、洗礼者ヨハネと、神学者ヨハネと、そのほかの多くの聖人たちとともにお立ちになり、母として涙に暮れながら、自らの創造主にして神に、かつて罪を犯し、いまも罪を犯している人々を赦してくださいように祈っているのを見た。

神の御母はこのように言った。「わが神よ、創造主よ、息子よ。神にして万物の統括者なるそなたに望みをかける、キリスト教徒たちのすべての罪をお赦しください。そなたの聖なる莊嚴なる御名を呼ぼう者たち、彼らとあなたの仲立ちをして祈る私、そなたの僕にして母である私をお赦しください。」そのとき、女主人にして神の御母である方は、イエス・キリストの御前で大胆さをわがものとしつつ、町と人々を自らの聖なるマフォ

(12) アダムの子で、すべての人間の母であるエバのこと。原初の母の呪いとは、楽園の戒めを破ったために神によってエバに課された罰のことを指す。

(13) 最初の人間であるアダム。キリスト教の中心的な教義であるアダムとエバの墮落は、「第二のアダム」であるイエス・キリストの到来によってはじめて救済されるものだった。

(14) イサクの次男。長男エサウの長子権をだまし取ったために、エサウは彼に復讐しようとした。ヤコブは逃亡した。逃亡の途中、ルズという土地で、「ヤコブは夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。」「創世記」28章12節。ヤコブはこの夢見のあと、長子権が自分にあると確信するようになった。天と地をつなぐこの階段は、神の御母の生誕の予言的象徴となった。

(15) 紀元前8世紀の預言者イザヤの言葉、「見よ、乙女が身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ」（『イザヤ書』7章14節）、ヤコブの階段（前述）、エレミヤの預言（『エレミヤ書』23章1－8節）、エゼキエルの預言（『エゼキエル書』44章2節）、洗礼者ヨハネの預言（『ヨハネによる福音書』1章15節）などを指す。

(16) イエス・キリストのこと。

(17) 『詩篇』44篇11節。

リオンで覆い、人々にたいする神のごとき慈悲と私たちへの仲立ちの心遣いを示された。そして、神の奇跡といと清らかなる神の御母の庇護が隠されなかつたばかりか、総主教と皇帝にもまざまざと顕れたがゆえに、いと清らかなる者の庇護の、いと清らかなる明さに満ち溢れた祝日を制定し、10月1日にそれを祝うことに決定した。偉大なる主なる神にして我らが救世主イエス・キリストと、神の御前で祈願者にして祈り手である、そのいと清らかなる母の栄光と誉れにおいて、教会は今日にいたるまでその祝いを執り行うのである。

祝いを好む者たちよ、このときから私たちは、女主人にして、町と人々を大いなる愛によって救う者の、この明るく栄えある新しき庇護の祝日を敬い、女帝にして女主人にしかるべき崇敬を捧げるべき者となったのであるが、それは神の御母が私たちから賞賛と栄光を求めたためではなく、神の御母に感謝を捧げることによって私たちが栄えある者となるためである。聖職者たち、皇帝たち、あらゆる階層の人間たち、富む者、貧しき者、すべての人々が祝日の賞賛を謳いあげ、我らの祈り手である神の御母を讃えるのだ。それぞれが感謝の気持を捧げるがよい。ある者は畏敬とともに謙遜を、ある者は齋戒と祈りを女主人に捧げるがよい。ある者は、乞食への喜捨で手を清めるがよい。ある者は兄弟への憤怒を赦すがよい。このようなことを行って、神の御母をもっと偉大なるものにするのだ。なぜなら、神の御母はそのような祝日の捧げ物を求められたのだから。

ギリシアの子らが祝うように、太鼓や豎琴、宴会によってではなく、祈りのなかで神の御母への賞賛の歌を歌うことによって、借金を返し終えた者のように、私たちの生が一新されたことを感謝し、恩寵を隠すことなく私たちが庇護されることを広く知らしめるのだ。なぜなら、神の御母は、皇帝の紫衣のように、その清らかさによって飾られ、皇帝とともに母として君臨するからである。私たちは「その敬虔なることケルビムのごとく、その栄えあることセラフィムのごとき」⁽¹⁸⁾を謳いあげよう。

もしも神の御母を天と地よりも高く、アダムにはじまるすべての被造物のなかでもっとも尊くと、このように唱えたとしても、私が罪を犯すことはないだろう。なぜなら、ケルビムとセラフィムを見ることがかなわないが、畏怖の念をもって聖なる讃め歌を捧げる者は、潔くいと清らかなる母が、自らの清き尊き腕によって支えてくださるからである。天に住むことができない者は、神を受け容れた神の御母の子宮が、難なく住まわせるからである。

万物の創造主は処女を蹂躪することなく通り過ぎた。乙女は清らかなままで、出産のときにも乙女は清らかなままに保たれ、その処女性は純潔なままだったのである。なぜなら、大いなる禁欲の念によって、処女たることと純潔を守り抜く乙女はいたことであろう。だが、いと清らかなる永遠の処女マリアは、禁欲の念のようなもので処女の清らかさを保ったのではなく、その本性そのものによって、何の困難もなく、大いなる純潔がそこにあったのである。というのも、この女帝にして女主人、神の息子の母であるこの乙女の身に、栄えあることが実現することは当然のことだったからである。すべての生き物と、営々と流れる時間に先立って、かの乙女に、神の子が宿る栄えある出来事は、約束されていたからである。

この乙女のことは、預言者たちが次のように言っていた。「御名は世々にわたって覚えられます。」⁽¹⁹⁾「今からのち、私を幸いなものと言うでしょう。いつの世の人もこの方を栄えある方と考えるでしょう。」⁽²⁰⁾地上の者たちは言うまでもなく、天上の者たち、天使たちや大天使たちは、女帝にして、彼らをお造りになった方の母にたいするごとく、畏怖の念をもって彼女のまえに立ちながら、祈禱歌を捧げるでしょう。罪深き私たちは、その清らかなる方を讃えるために、どんな言葉で唇を開くというのでしょうか。いかにすれば、永遠の処女なる神の御母の偉大さにふさわしい讃仰を、彼女に捧げることができるのでしょうか。もしも天使の知恵をもってしても、それにふさわしい讃仰の言葉によって、天なる父が讃え、聖霊が守り、神の息子が朽ちることなく彼女を通して、その乙女を讃えることができないというのなら、本性より以上の、人間の本性よりも、天使の理性よりも高い秘蹟が起こったということである。

しかし、私は何を多く語っているのだろうか。経験されなかつたことに到達するのは不可能であるが、いまは

(18) いと聖なる神の御母を讃える教会の祈禱歌のテキストが用いられている。「その敬虔なることケルビムのごとく、その栄えあること真実にセラフィムのごとく朽ちることなく、神のロゴスをお産みになった神の御母、そなたを讃えましょう。」

(19) 『詩篇』102篇13節；135篇13節。

(20) 『ルカによる福音書』1章48節。

いまの祝日について祝われることが語られるであろう。いま起こった栄えある女主人様の奇跡の偉大さ、自らのお気に入りの者たちに示された幻視の偉大さについて、自らの息子である神への、罪ある者たちにかかわる赦しと慈愛の祈りについて、誰が物語ることができるだろうか。彼女の恵み深い行いにたいする返礼として、どのような報いを返すことができるだろうか。

しかし、私は何を多く語っているのだろうか。経験されなかったことを理解しようとするのは無益であるが、いまある祝日については祝いの言葉が言われよう。栄えある女主人のもとでまさに起こったその奇跡と、自らのお気に入りの者への顕現の偉大さを、罪を犯した者を許して下さるようにと、自らの息子である神へ捧げてくださっている慈悲深い祈りを、誰が語ることができようか。

喜びに値する大天使の言葉を私たちは唱えよう。

「喜びに満ち溢れた女よ、喜ぶがよい。主はそなたとともにおられます。そなたゆえに主は人々とともにおられます。喜ぶがよい、生命に満ちた樂園よ。そこには神の木、キリストが植えられました。アダムを死にいたらしめた、あの木ではなく、逆に、すべての者たちに不死と命とをあたえる木です。喜ぶがよい。天の真珠であるキリストを自らのうちにしまい込んだ、神の櫃よ。私たちに命を注ぐ、生きたる水の泉よ。喜ぶがよい。大天使たちの歓喜よ、天使たちの喜びよ、この世に生まれてきた者たちへの刷新よ。喜ぶがよい。海を引き分け、迫害者ファラオを自らの息子の力によって沈め、選ばれた民へ、約束の地にいたる道を指し示した、モーセの錫杖よ。喜ぶがよい。そこから素晴らしい花、キリストが咲きいで、腐敗することなくキリストが生まれたもうた、帝王にして司祭であるアーロンの錫杖よ。喜ぶがよい、夜明けの光の明星よ。異端の闇を遠くに追い払い、世を照らす神のすべての創造よ。喜ぶがよい、そなた、至福きわまるアンドレイよ、我らが父よ。至福の弟子であるエピファーニイとともに、得も言われぬ幻視の秘密の、信頼すべき目撃者となったことを喜ぶがよい。喜ぶがよい。そなた、このような師の、折り目正しい弟子と呼ばれる栄誉を受けた者、至福のエピファーニイよ。

女主人様、清らかこの上ないあなたの祝日を敬うすべての人々は幸いです。そなたのおかげで、我らの町とすべての宇宙は、悪魔の嘘から救われ、そなたの息子の十字架によって、あらゆる人類の父祖であるアダムは樂園へふたたび帰ることができたのです。女主人様、そなたゆえに、人々から情欲が追い払われ、私たちは魂と身体を健康を得ることができたのです。なぜなら、そなたは悲しむ人々に慈悲深い慰め、喜びをおあたえになるのですから。そなたは真の生命の母なのですから。そなたは地から天へと移ったけれども、肉においては生きたままで、このゆえにかしこで、帝王にして息子とともに、天の宮居で永遠に君臨されるでありますから。このゆえに、慈悲深き我らが種族の神をお産みになった慈悲深きそなたに、祈りを捧げるのです。私たちが罪を犯したとしても、助けなしにしたままにしないでください。永遠に災厄から我らを守り、悲しみから我らをお救いください。なぜなら、女主人様、そなたは正教の人々の逃げ場であり、敵たる者たちからの堅固な守りです。私たちはそなたの庇護と助けを求めます。そなたへの望みで我らは強められます。そなたの息子の力で、敵の軍勢は打ち負かされます。このゆえに、神の御母よ、そなたはあとき、そなたを天の皇妃として敬う人々を慈悲深く気遣われたのですから、いまも自らの敬虔なる覆いで庇護するのをやめないでください。襲い来る蛮族の企みを打ち砕いてください。そなたの敬虔なる聖堂に、祈りと願いをもって来たるすべての者たちをお救いください。そなたの祈りによって、我らが騒乱を避け、この生を過ごすことができますように。帝王にして我らが主イエス・キリスト様のおかげをもちまして、永遠の福を授かることができますように。イエス・キリスト様に、始原なき父と、聖なる福なる生の源なる聖霊に、誉れと王国、崇敬と跪拝がいつも世々永遠にありますことを。アーメン。」

〈解説〉

『大曆聖者伝（ヴェリーキエ・ミネイ・チェチイ）』には、神の御母の庇護の祝日に捧げられたいくつかのテクストが収められている。『曆聖者伝（プロローグ）』の物語「聖アンドレイとエピファーニイの幻視。二人がどのように空中の神の御母を見たか」、「聖なる神の御母にして永遠の処女マリアの聖なる庇護への賞賛の辞」、「聖なる神の御母にして永遠の処女マリアの敬虔なる庇護への賞賛の辞。謙遜なる修道司祭パホーミイの創作」

である。

ここに収められた『曆聖者伝（プロローグ）』の物語のテキストは安定したもので、テキストの異同も最小限で、すでに12世紀から13世紀の『プロローグ』に収められたものとして定着していた。

2つ目の刊行テキストは、有名な聖者伝作者であるセルビア人のパホーミイ（・ロゴフェト、1484年以降に逝去）の手になるものである。パホーミイはアトスからルーシのノヴゴロドに来た。そのときのノヴゴロド大主教はエフィーミイ2世（在位1429-1458）であった。パホーミイは一連の聖者伝、頌詞、祈りの勤め、物語の作者であった。『プロローグ』の10月1日の項には、ほかに「ヴィシエラのサツヴァ伝」が収められている。「ポクロフへの講話」の写本の一つ（РНБ, собр. Кирилло-Белозерской библиотеки, №1258）には、「この恩寵あふれる頌詞は、聖山からきたセルビア人、修道司祭パホーミイの手によって、ノヴゴロドとプスコフの聖なる大主教、高位聖職者イオアンの命令と祝福にもとづいて書かれたものである」という書き付けが残っている。「庇護への賞賛の辞」はパホーミイ・ロゴフェトにより、おそらくはノヴゴロドで、その2回めの滞在のときに書かれた（滞在は、1459年、1460年から1461年にかけて、1462年の3回）。ただし、この作品は、大主教ヨナについての『回想』における、この雄弁家の作品の数え上げのなかには載っていない。この「賞賛の辞」の示すところによると、このテキストには少なくとも2つの編纂本があった。そのうちの一つ、短い版は、府主教マカーリイの『大曆聖者伝』に収められたものである。一連の写本のなかにある第2の編纂本は、この講話のいくつかの断片の文体的な改変を含んでいる。この改変が作者自身によるものなのか、ほかの文筆家によって行われたものなのかは、不明のままである。パホーミイ・ロゴフェトによる「庇護への賞賛の辞」のオリジナル史料となったのは、「聖アンドレイとエピファニーの幻視についての物語」である（ヤコブソン『セルビア人パホーミイとその聖者伝：伝記的、伝記文学的覚書』サンクトペテルブルグ、1908年、126-129頁）。

このテキストは、写本РНБ, Софийское собр., №1318, лл.9-9об., 13-14に拠っている。以上の解説は、翻訳の原典テキストに付されたМ.А. Федотоваの解題にもとづいている。

出典：В тот же день празднуем Покров Святой Богородицы. О видении святого Андрея и Епифания, когда видели они в воздухе святую Богородицу (*Подготовка текста, перевод и комментарии М.А. Федотовой*); Слово похвальное честному Покрову пресвятой Владычицы нашей Богородицы и Приснодевы Марии. Творение смиренного иеромонаха Пахомия (*Подготовка текста, перевод и комментарии М.А. Федотовой*) // Библиотека литературы Древней Руси. Т. 12. С. 52-61, 543-547.